様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１７日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：22730530
研究課題名（和文）　家族のライフヒストリーが現在の家族に与える影響に関する研究

研究課題名（英文）　The Influence of Family Life History on Current Family Relationships

研究代表者
若島　孔文（WAKASHIMA KOUBUN）
東北大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60350352

研究成果の概要（和文）：
本研究では、累積的な家族関係を測定するための方法論として家族関係ヒストリーグラフ（FRHG）を提案し、信頼性と妥当性の検討を行った。その結果、FRHG の内の結びつきの使用が望ましいことが示唆された。FRHG を用いた国際比較の点では、中学校以降において日本は韓国・中国よりも家族の結びつきが低くかった。また、男性と女性においては累積的家族関係に相違がみられた。FRHG と SDS の関連では、SDS の高群でのみ、FRHG と関連が見られ、臨床群の家族では一般的な累積的家族関係の変遷を描かず、特有の家族関係が描かれることが見受けられた。

研究成果の概要（英文）：
We developed Family Relationship History Graph (FRHG) that assesses cumulative family relationship. We examined validity and reliability of FRHG. The result confirmed cohesion subscale has validity and reliability and thus valid for use. Cohesion subscale of FRHG differed by country. Japanese had lower cohesion score than did Chinese and Korean. Also, participant’s gender differentiated FRHG scores. Furthermore, only SDS high group had a correlation between SDS score and FRHG score. The result implies a psychological problem could differentiate family relationship trajectory.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	200,000	60,000	260,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
2012 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	600,000	180,000	780,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：累積的家族関係　方法論　家族関係ヒストリー・グラフ

１．研究開始当初の背景

過去における親子関係が現在の問題や症状の発生をもたらすという視点は Freud 以降、心理療法や臨床心理学における伝統的な視点となっている。言わば親子関係あるいは家族病因論である。しかしながら、どのような

家族関係が問題や症状と関連しているのかを過去から現在に至る累積的家族関係から捉えた実証的知見は意外なほど少ない。

累積的家族関係というのは、ある人が過去の家族関係をどのように捉えてきたのかという、いわばその人の家族についての物語を反映したものである。従って、累積した家族関係を研究によって扱う場合は、ある人が持つ過去から現在にかけてのストーリーを尋ねる必要がある。このような語りは、カウンセリングにおいてクライエントが語る家族関係をリアルに反映しているということが考えられる。このようなことから累積的家族関係に関する実証的な知見に加え、累積的家族関係を測定する斬新的な方法論の開発が求められた。このような方法論の開発を行うと同時に、過去から現在に至る時間的要因を考慮した家族内の関係性が現在の家族関係にどのような影響を与えているかを明らかにすることが複雑な家族システムを理解する上で必要であった。

２．研究の目的

以上のような背景を踏まえ、本研究では、まず、家族の累積的な関係を測定するための斬新な方法論として家族関係ヒストリー・グラフ(以下 FRHG)の提案および作成を行った。次に、FRHG の信頼性と妥当性の検討を行った。最後に, FRHG の利用とそのデータの分析手法を確認した上で、過去から現在に至る時間的要因を考慮した家族内の関係性が現在の家族関係にどのような影響を与えているかを明らかにするため主として以下の 3 点について検討を行った。

(1)国際比較を踏まえた日本における家族関係の推移の特徴と過去の家族関係の現在への影響の検討

(2)男女差を踏まえた FRHG から見た家族関係の推移の特徴や、現在の結びつきと関連する時期および二者関係の明白化

(3)臨床的要因および臨床群における家族関係の特徴と過去の家族関係の現在への影響の検討。

３．研究の方法

・研究Ⅰ(方法論の提示)

質問紙による調査を行った。調査対象者は専門学校生ならびに大学生計 108 名(男性 34 名、女性 74 名)であり、平均年齢は 20.6 歳であった。質問紙の構成は、家族関係の測定として、FRHG を作成した。FRHG では、調査協力者の 3 歳から現在に至るまでの家族関係の良し悪しについて＋5～－5 のあいだで一本のグラフを描くものであり、三者関係（父･母･子ども）の 3 領域に関して測定されている。ここで述べる 3 領域とは、①各二者間の結びつき②家族内の勢力③子どもの感じた家族内に関連するストレスであった。

・研究Ⅱ（FRHG の妥当性と信頼性の検討）

質問紙による調査を行った。調査対象者は専門学校生ならびに大学生計 287 名(男性 95 名、女性 192 名)であり、平均年齢は 20.24 歳であった。妥当性の検討の手続きとしては、年代ごとに得られた幼少期から青年期にかけての家族関係の結果を NFRJ98 によって算出された父子関係、母子関係の質の平均値との間での相関関係について検討をおこなう。信頼性の分析における調査対象者は、大学生 31 名(男子 13 名、女子 18 名、平均年齢 20.45 歳であった。それぞれ１ヶ月、４ヵ月の間隔を置いたうえで、同じ調査協力者に対して FRHG の回答を２回求めて、再検査法の観点から信頼性の検討を行った。

・研究Ⅲ（国際比較を踏まえた累積的家族関係）

質問紙調査を実施した。対象者は日本人の男性 73 名（平均 21.82 歳)、女性 96 名（平均 21.62 歳)、韓国人の男性 102 名(平均 22.84 歳)、女性 123 名（平均 20.88 歳)、中国人の男性 76 名（平均 21.34 歳)、女性 161 名（平均 20.47 歳）の計 631 名（平均 21.37 歳）のデータを分析に使用した。質問紙の構成は、①フェイスシート、②FRHG による父母、父子、母子の 3 者間の「結びつき」因子である。

・研究Ⅳ（男女差や臨床的な側面を踏まえた累積的家族関係の特徴）

Wakashima et al(2011)にて報告されたデータ（2009 年 10 月。大学生・専門学校生を対象。平均年齢は 20.64 歳）から 75 名（女性 57 名、男性 18 名）および 2013 年 2 月にインターネット調査により FRHG を実施され、100 名（女性 48 名、男性 52 名）のデータを追加した（18 歳から 28 歳までの大学生を対象。平均年齢 21.74 歳)。SDS はこの 100 名のみに実施された。臨床群のデータは、2009 年 11 月以前から 2012 年 1 月にかけて実施された。臨床群の評定者は、男性 3 名・女性 6 名（平均年齢 41.00 歳)であり、IP との間柄は母が 6 名､本人が 2 名､父親が 1 名であった。なお、本研究は大学の倫理委員会の審査を受け、承認されていることを付記する。

４．研究成果

・研究Ⅰの成果

本研究では、ナラティヴに基づくような過去から現在に至る累積的家族関係により、家族を総合的に理解する新たな研究手法を報告した。その中で、累積的家族関係を捉えるために、FRHG を使用し、その尺度を用いた研究の方法論を提示した。本研究では、青年期後期の女子が感じる｢家族に関連するストレ

ス」は、現在、ないし直前の父子関係とのあいだに強い関連があることが示唆された。

また、「現在の父子結びつき」は現在やその直前の母子関係とのあいだに強い関連が見られた結果からも、父子関係と母子関係のあいだの関連性を強く示すものであろう。ある時点における子どもの困難に対して当人を含めた家族関係を支援対象とする際には、子どもの幼少期のような過去の家族関係の認識に変化をもたらすこと以上に、まずは現在の家族関係に着目することが有用であることが示唆された。

しかしながら、FRHG を使用する上で、信頼性と妥当性の検討が必要不可欠な課題となった。

・研究Ⅱの成果

研究Ⅱにおける妥当性の検討では、NFRJ98 の「関係性の質」項目と FRHG の「結びつき」の比較が試みられた。3 歳から 18 歳までの FRHG に示された父子関係・母子関係の結びつきは、同年齢の NFRJ98 の関係性の質との相関がそれぞれ.92 と.76 であり、現時点において想起された累積的親子関係の推移は、各年齢時において測定された親子関係の結果を累積させて作られた推移と変わらない結果を示したと言える。このことから FRHG には過去から現在の家族関係を測定する尺度としての一定の妥当性がある。

次に、1 ヵ月の再検査信頼性の検討では、3 歳から 20 歳までの結びつきの相関は高く、勢力では 9 歳から 20 歳までの相関は高いものであった。4 ヶ月の再検査信頼性では、概ね 15 歳以上で安定した相関が見られ、勢力では不安定な相関関係を示した。つまり、妥当性・信頼性を考慮したとき、結びつきという変数を用いることがよりよい選択と考えられる。

また、勢力の結果を考慮すると、小学生段階以降の結果を使用することが望ましいと推察された。

・研究Ⅲの成果

研究Ⅲでは、FRHG による結びつきの項目を用いて、日本、韓国、中国の間で比較検討を行った。その結果、中学校以降において日本は韓国・中国よりも家族の結びつきが低いことが明らかにされた。本研究では家族の結びつきが国によって大きく異なることを明らかにしたと言えるだろう。同じ東アジアに位置する国でありながら、異なる特徴を示した理由について本研究で詳しく述べることはできない。それぞれの国における家族関係や家庭・学校における教育スタイルの違いといった社会・文化的な要因についても検討していくことが必要であると考えられ、今後の課題の一つであると言えるだろう。

・研究Ⅳの成果

研究Ⅳでは，1)男女差を踏まえた FRHG から見た家族関係の推移の特徴や、現在の結びつきと関連する時期および二者関係の明白化に加え、2)臨床的要因および臨床群における家族関係の特徴と過去の家族関係の現在への影響の検討を行った。

一般的家族関係では、現在において、父－子の結びつきがやや低下するようである。母－子関係では、中学時期がやや低下するものの、それ以外は比較的安定していた。父－母関係も比較的安定している(Figure1 参照)。

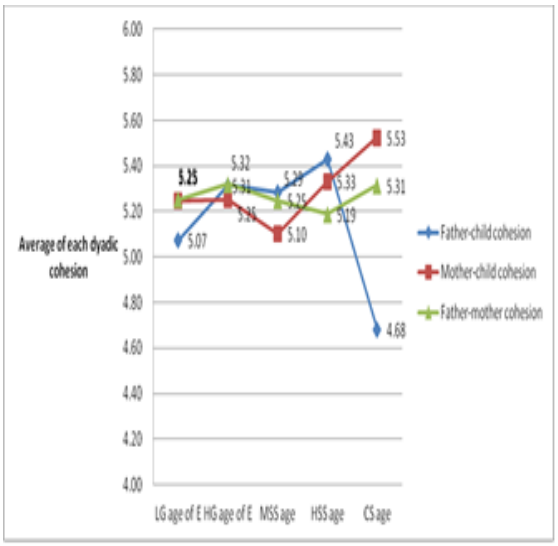

Figure1.家族の結びつきの平均値

男女別にみると、男性は全般的に現在の結びつきを高く認知する傾向がある(Figure2 参照)。

女性は母親に対して中学時期にやや低下を示すものの、高い結びつきで比較的安定していると認知しているようであった。また、父親との関係は現在において低下していると認知しているようであった。夫婦関係は中学時期・高校時期にやや低下するが、現在は以前の高い結びつきの時期と同様であると認知しているようであった(Figure3 参照)。

また，男性の場合、父－子結びつきが現在の他なる二者関係に関連している一方で、女性の場合、父－子結びつきは現在に近い時期の父－母結びつきに緩やかな関連があった。また、母－子結び付きでは、男性では各時期と他なる二者関係と全般的に関連している一方で、女性の場合、より初期の父－母結びつきや、小学校低学年・高学年時の父－子結びつきの関連が見られるなど、男性と女性による累積的家族関係の相違、あるいはその認知に相違があった。

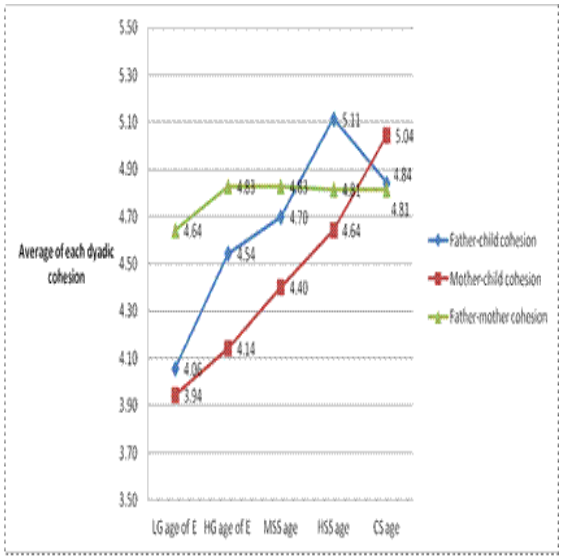

Figure2. 男性の家族の結びつきの平均値

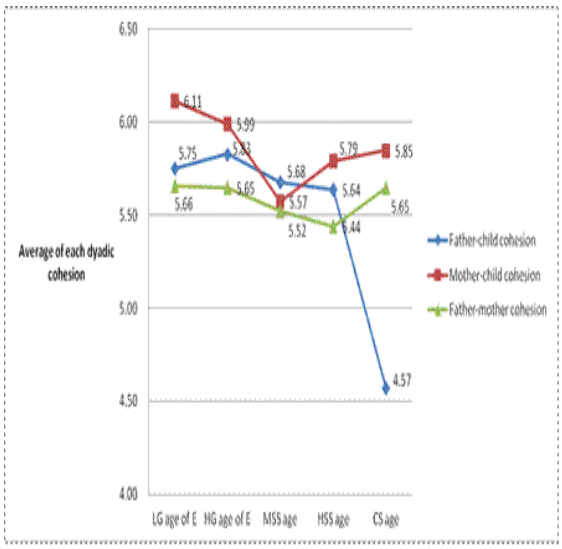

Figure3. 女性の家族の結びつきの平均値

次に、FRHG と SDS の関連を検討した。その際、SDS 得点を高群・中群・低群に区分して、それぞれ FRHG との相関を分析した。その結果、SDS 高群でのみ、FRHG との関連が見られた。例えば、男性では、小学校高学年時期の父－子結びつきが、女性では、高校時期の父－子結びつき、および、中学時期の父－母結びつきが有意な関連を示していた。また、変動性と SDS 得点の関連も指摘できた。男性において、高校生時期から現在での父－母結びつきの低下は、現在の SDS 得点に弱い関連を示した。また、有意ではないが小学校低学年時から高学年時での母－子結びつきの低下は、男性で r=-.24、女性で r=-.22 という関連を示している。これらは直接的な関連ではないかもしれない。

しかしながら、サンプル数を増やして、また、SDS 以外のその他の適切な尺度を用いて再検討してみる価値はあるであろう。

最後に、FRHG を用いた家族関係の推移の臨床群と非臨床群（一般群）との比較では、臨床群は非臨床群に比べて、父－子結びつきは問題の生起により、あるいは高校時期以降に低下、もしくは低下したと認知しているようであった。また、母－子結びつきについては、臨床群では非臨床群に比べて、全般的に低い、あるいは低いと認知していた。父－母結びつきもまた、問題の生起によって、あるいは高校時期から現在にかけて、急激に低下、もしくは低下したと認知しているようであった。

・まとめ

本報告は、FRHG を用いた臨床研究への接近の手法を示すことであり、実際にここで示した結果を信頼する必要はない。あくまでも累積的家族関係から家族システムを把握することが重要であり、そのために FRHG の使用法と研究の手法を提示することが必要性をもった。家族システム論においてはこれまで過去から現在などを含む時間概念は保留される傾向にあり、共時的な家族関係から家族システムを理解するという傾向が強かった。

しかしながら、本研究において累積的な家族関係も考慮しながら家族システムを理解していくことの重要性を示したことは十分に意義があるといえる。特に、これまでの多くの家族研究は、問題の原因として家族関係を検討しているが、本研究では、家族内で問題が発生したことで、否定的な家族関係が構築されている、あるいは否定的に家族関係を認知するという可能性が臨床群のデータから推察することが出来た。

今後はサンプル数を増やしながら安定した知見を提示することが課題といえる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① Wakashima,K・Kobayashi,T・Hiraizumi,T・Morikawa, N・Usami,T・Itakura,N 、Directivity of the research on the cumulative family relations which use the family relations history 、graph*International Journal of Brief Therapy and Family Science*、3(1)、2013、in press、査読有

② 宇佐美貴章・狐塚貴博・平泉拓・森川夏乃・古山杏加里・若島孔文、ナラティブに基づく累積的家族関係、Interactional Mind Ⅳ、2011、北樹出版、22-28、査読有

③ Usami,T・Kozuka,T・Hiraizumi,T.・Morikawa,N・Furuyama, A & Wakashima, K、Examining Family Transition with the Current Narratives、International Journal of Brief Therapy and Family Science、1(2)、2011、111-116、査読有、URL: http://www.brieftherapy-japan.com/images/IJBF/IJBF_No.1_pp111-16.pdf

④ Wakashima, K・Kozuka,T・Itakura, N & Usami,T、Simultaneous and Cumulative Family Relationship: Examining with ICHIGEKI、*International Journal of Brief Therapy and Family Science*、1(2)、2011、104-110、査読有、URL: http://www.brieftherapy-japan.com/images/IJBF/IJBF_No.1_pp104-110.pdf

⑤ Wakashima, K・Noguchi,N・Usami,T・Yu, K・Zhang,Z・Nagayama,Y・Asai,K・Nakajima,N・Hiraizumi,T・Furuyama,A・Morikawa,N・Sato,M・Shimizu,A & Kozuka,T、A Study of Examining the Effect of both Self-determinative behaviors and Family Relationship History to the Current Basic Psychological Needs of Child. -Comparison between China, Korea and Japan-、*International Journal of Brief Therapy and Family* Science,、1(2)、2011、98-103、査読有、URL: http://www.brieftherapy-japan.com/images/IJBF/IJBF_No.1_pp98-103.pdf

⑥ 若島孔文・狐塚貴博・板倉憲政・宇佐美貴章、「ICHIGEKI」を用いた同時的・累積的家族関係に関する研究、Interactional Mind Ⅲ、2010、北樹出版、92-98、査読有

〔学会発表〕(計3件)

① 平泉拓・宇佐美貴章・浅井継悟・森川夏乃・古山杏加里・若島孔文、累積的家族関係を分析するための方法論に関する研究 ー「変化」の測定方法についてー、日本ブリーフセラピー協会第3回学術会議プログラム、2011年10月23日、仙台

② 宇佐美貴章・狐塚貴博・平泉拓・森川夏乃・古山杏加里・若島孔文、ナラティブに基づく累積的家族関係ーFamily Relationship History Graphからの検討ー、日本ブリーフセラピー協会第2回学術会議プログラム、2010年10月31日、千葉

③ Wakashima,K・Usami,T・Kozuka,T・Itakura,N & Noguchi,S、Proceeding A study examinig the association between both past and the current family relationships and child's family related stress in late adolescence、20th Anniversary Conference、International Academy of Family Psychology、May 13-16、2010 Callaway Gardens, Pine Mountain, Georgia USA.

〔図書〕(計1件)

① 若島孔文 2010 第3章 同時的家族関係と累積的家族関係 若島孔文(編)、2010、家族療法プロフェショナルセミナー、金子書房、61-81頁

６．研究組織

(1)研究代表者

若島 孔文(WAKASHIMA KOUBUN)
東北大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60350352

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究

該当なし